

(別添)

**構造改革特別区域
「三歳未満児に係る幼稚園入園事業」
の実施に係る留意点**

平成18年 5 月

文部科学省初等中等教育局幼児教育課

1 2 歳児の発達の特徴

- 幼稚園内の施設において2歳児を受け入れるに当たっては、その発達の特性を十分に理解し、発達に応じた保育を行うことが重要である。特に、2歳児は、様々なものや人への関心が広がり、ひとりでできることが少しずつ増え、自立に向かいつつも、基本的には大人への依存性が極めて高い時期にあることに十分配慮して、保育を行う必要がある。具体的には、次の事項に留意をお願いしたい。

(1) 自己主張と甘えの気持ち

- 2歳児になると、生活に必要な行動が徐々に一人でできるようになり生活習慣の自立が進むが、一方では、まだ大人の励ましや手助けが必要である。
- 2歳児は、「自分でする。」という自己主張が強い反面、「自分でできないからしてほしい。」という甘えの気持ちももっている。つまり、「やりたい。でもうまくできない」ということが多く、こうした場面で大人（保育者）がどうかかわるかが重要である。
- 大人が、幼児の自立したい気持ちと大人に依存していたい欲求との間で葛藤する気持ちの揺れを受け止めつつ、幼児なりに「できた」という成就感や成功感が味わえるように支えていくことが大切であり、こうした体験が幼児の自立心をはぐくんでいく。
- すなわち、この時期には、幼児の自己主張と甘えとの間で揺れる心を理解する人の存在が重要であり、そのことが幼児のその後の発達を左右する。

(2) 基本動作の獲得と危険

- 体力がつき、少しずつ運動機能が発達してくるので、行動が活発になり、転がる、跳ぶなど全身を使う運動を楽しむようになる。また興味をもった体の動きを繰り返しながら、様々な基本動作を獲得していく。
- このため、保育者は、様々な体の動きを誘う遊具を用意したり、単純な動き方であるが同じ動きを繰り返し楽しむ幼児の姿を受け止めていくことが大切である。
- しかし、まだ危険に対する認識が不十分であり、自分の力の限界がわからないところがある。このため、周りにいる大人が安全について十分な配慮をすることが必要である。

(3) 平行遊びとぶつかり合い

- 友達と一緒にの場所で同じ遊びをしていますが、相互のかかわりが少なく、平行遊び（複数の幼児が同じ場所（保育室）にしながら、幼児同士が互いにかかわり合うことなく、それぞれが単独で自分のしたい遊びをしている形態）であることが多い。大人の仲介によっては、友達に関心をもち、一緒に遊ぶこともあるが、その場合、互いに自己主張をして譲らず、言葉で思いをうまく伝えられないことから、叩いたり噛みついたりするなど取っ組み合いのけんかになることもしばしばある。

- しかし、こうしたぶつかり合いの体験の中で、自己主張したい気持ちを受け入れてくれる大人のかかわりがあれば、しだいに自分とは異なる思いをもつ友達をも受け入れることができるようになる。
- 大人に見守られる中で、徐々に友達と一緒に遊ぶことの楽しさを味わうことができるようになっていく。

(4) つもりになって遊ぶ姿

- 「ごっこ遊び」などの、何かになった「つもり」を取り入れた遊びをするようになってくる。こうした遊びの中で、身近な大人の行動やしぐさを取り入れる経験を繰り返すことを通して、幼児の観察や模倣がさらに進み、現実の生活をなぞり再現しながら、その幼児なりの理解ではあるが少しずつ自分の生きる世界を知っていく。
- しかし、一方で、幼児のイメージの表現は素朴で断片的であり、その幼児なりの表現なので周りに伝わらず、遊びがすぐに終わってしまうことも少なくない。自分の力で遊びを創り出す力はまだ未熟である。
- したがって、大人が、幼児の表現を受容しながら、一緒に遊ぶことが大切であり、遊びをつなぐ大人のかかわりは、3歳以上の幼児の姿とは大きく異なるところがある。

(5) 言葉に対する興味とかんしゃく

- 単語だけ、あるいは助詞がなく二語文ではあるが、生活に必要な言葉が少しづつわかり、大人と簡単な言葉のやりとりができるようになる。生活の中で聞き取ったいろいろな言葉を自分で使ってみる姿も見られる。しかし、したいことや感じていることなどの自分の思いを言葉にして相手に伝えることはまだうまくできず、時には、かんしゃくを起こしたりする。
- この場合、幼児の話に、大人（保育者）が耳を傾け、その思いをくみ取りながら言葉にすることにより、安心して自分の思いを言葉に表すようになる。しかし、早急に言葉で表現することを求めたり、間違いを指摘したりすることにより、言葉で表現することに抵抗を感じてしまったりもするので、大人のかかわり方は重要である。

(6) 簡単なきまりや約束

- 信頼する大人の言うことを正しいと受け入れて、結果的にそれに素直に従う傾向が強い。したがって、人を叩く、ものを投げるなど、してはいけないことについては、大人が、具体的な場で、はっきりと否定したり、どうしたらよいのかを知らせていくことが大切である。
- 特に、保育者が、幼児と一緒に生活し、幼児が順番や交代などの簡単な遊びのきまりや約束を守れるように繰り返し働きかけることが大切である。

2 幼稚園が2歳児を保育する上での留意事項

(1) 基本的な考え方

- 幼稚園は、学校教育法に基づく学校であり、満3歳から小学校入学の始期に達するまでの幼児を対象にして、意図的、計画的な教育を行う場である。幼稚園教育では、同年代の幼児との集団生活の中で、幼児の主体的な活動としての遊びを重要な学習として取り上げ、遊びを通してねらいを総合的に身に付ける指導を行う。

すなわち、幼稚園教育における教師の役割は、幼児の主体的な活動を促すために計画的に環境を構成し、さらに幼児の活動にそって様々な役割を果たしながら、幼児の主体的な活動の中で、

幼児自らが発達に必要な経験が得られるように、組織的・継続的な指導を行うことである。

- こうした主体的な活動を通して教育を行うことが可能となる前提には、幼児が自ら環境とかわり活動を生み出す、様々なイメージをふくらませて、それらを実現させながら活動に取り組む、そのイメージを友達と共有して楽しむなどの「遊びを創り出す力」をもっていることが挙げられる。こうした幼稚園教育にふさわしい幼児の発達段階を考慮して、幼稚園では、教育の対象を満3歳からとしている。
- 大人への依存が高い2歳児を幼稚園内の施設に受け入れる際には、幼児の主体的な活動を前提として行われる満3歳以上の幼児を対象とする幼稚園教育をそのまま当てはめていくのではなく、2歳児特有の発達を踏まえた保育を展開し、その成果を3歳児以降の教育につなげていくことが大切である。
- こうした視点から、2歳児保育の基本的な考え方を挙げてみると、次のとおりである。
- ① 保育者は、保護者に代わる存在として、幼児との一対一の関係を大切にして信頼関係を築き、幼児が安心して自分の気持ちを表したり、自分の思いで行動したりするようにする。
- ② 幼児一人一人が、食事、排泄、衣服の着替えなどの健康で清潔な生活の習慣を身に付け、自立しようとする意欲をもつことを重視する。
- ③ 保育者は、幼児と一緒にいろいろな遊びをしながら、ものや人への興味や関心を引き出し、幼児の世界を広げていくようにする。
- ④ 2歳児の動き方や遊び方を踏まえ、健康や安全に十分に配慮した園舎内外の保育環境を整備する。
- ⑤ 親子で一緒に活動したりして、保護者が子育ての喜びや楽しみを味わう機会をつくりながら、親として成長できる場を提供していく。

(2) クラス・グループ等の編成と保育者の資格

- クラスやグループ等の編成や保育者の資格は、2歳児の発達の特性や2歳児保育の特質を踏まえる必要がある。

ア クラス・グループ等の編成と職員配置

- 2歳児は、大人への依存度が高く幼児同士のつながりがあまりない、食事や排泄などの自立が重要である等、3歳児との発達の差が著しいことから、2歳児に対する保育内容や保育者の役割は、3歳以上の幼児に対するものと異なる。

2歳児の保育の特質を踏まえれば、2歳児の保育については、満3歳以上の幼児とは別に2歳児の集団を編成して保育することが望ましい。

- 上記によりがたい場合で、幼稚園の「満3歳児学級」（年度の途中で満3歳になって入園した幼児により構成される学級）等に当該2歳児を組み入れて保育するときは、担当教員等の業務が2歳児にばかり向かうこと等により当該学級における満3歳児等の発達を妨げることのないように配慮するとともに、同時に、当該満3歳児等に合わせた集団活動等が当該2歳児の発達を妨げることのないように配慮しながら保育を行うことが必要である。
- 上記いずれの場合も、2歳児に対しては、同様の保育を実施している保育所の職員配置基準に準じた保育者の配置を行うことが望ましい。

すなわち、遊びと排泄などの基本的な生活習慣を身に付けることなどが同時に展開することから、多人数を保育する場合は、主担当の保育者に補助の保育者を加えるなどの対応を行うことが

望ましい。その際、低年齢児の保育について長い実績を有する保育所において、2歳児の場合、おおむね幼児6人につき保育士を1人以上配置するという基準を設けていることが参考となる。

- また、2歳児の場合、個々の発達、体力等の実情や家庭の状況により、毎日登園する幼児、定期的に週数回登園する幼児、不定期に登園する幼児などがいると想定される。こうしたことに配慮してクラスやグループ等を編成することが大切である。

場合によっては、人数等の理由により、登園日数が異なる幼児が混合して同一のクラスやグループ等を編成することもある。その際、固定したクラスやグループ等を編成することにより、どの幼児も、いつでも安心して登園し、自分の居場所を確保できることが大切なので、保育者は個々の実情に配慮してかかわることが必要である。

- こうしたクラスやグループ等が、保護者にとっても、他の保護者とつながりを感じ、子育て情報を交換したり、子育ての楽しみを共有したりする場となることも大切であり、そのための働きかけのプログラムをもつことも必要である。

イ 保育者の資格

- 保育者は、当該幼稚園の3歳児以上の教育課程に基づく教育活動とのつながりを意識して2歳児保育を行うことが大切であるが、2歳児の場合、特に養護的なかわりが必要なことから、保育士資格を有することが望ましい。

(3) 施設・設備

- 2歳児保育を行う際には、2歳児の遊び方や動き方等に配慮し、発達に必要な施設・設備を整えることが求められる。

特に留意したいこととして、次のことが挙げられる。

なお、各幼稚園の施設・設備の状況や2歳児保育の人数に応じて、その他の工夫や配慮を要することもあるので、それぞれの実情に応じてさらなる検討が必要である。

ア 園舎内の施設・設備

ア 2歳児の保育室と園舎内の環境

- 2歳児の保育室は、幼児の生活の拠点となる空間であることに配慮し、幼児の登降園時の出入口との距離が近い、園庭に出やすい、他の保育室との関係では2歳児の遊びや生活が確保できる位置に置くなど、適切に配置することが望ましい。

また、緊急時の幼児の安全確保等の理由から、教職員室から見通しがよく、近い位置に配置することが望ましい。

- 2歳児の場合、保育者と一緒に行動したり、行動範囲が限られていたりして、3歳以上と比べると保育室で過ごす時間が比較的長い。また暑い時期には午睡をしたりすることもある。このため、保育室の日照、採光、換気、通風、音響、衛生等には、特に配慮する必要がある。
- 保育室を中心にして、できるだけ園舎内の段差をなくすなど、2歳児が安全で快適に生活できるような、施設・設備の整備の工夫をすることが望ましい。

イ 保育室内の環境

- 保育室の環境は、2歳児が安心して生活ができるような家庭的で温かい雰囲気があることが大切である。また、衣服の着替えをしたり、横になることができる畳やじゅうたんなどのくつろげる空間があることが望ましい。
- 机や椅子などは、2歳児の身体に合わせたものを用意する必要がある。その際、特に入園当初

は、身体の成長の差も大きいので、椅子が高すぎる場合には、足のせ台を置く等、個人差への配慮が必要である。また、中には体が安定せず一人で椅子にじっと座ってられない幼児もいるが、この場合、肘掛けのある椅子などを用意すると安定することもある。

したがって、必ずしも一律に同じ大きさや形の机や椅子を用意するのではなく、幼児の様子を見ながら、正しい姿勢がとれることや安定性などに配慮して、机や椅子を選択していくことが大切である。

- 登園時には、鞆などの自分の持ち物は決められた場所にいつも置くという習慣を身に付けることが大切なので、個人用ロッカー等の収納棚が必要である。その際、個人用ロッカー等の収納棚が幼児が出し入れできる形や大きさであること、また登園したらすぐ鞆や持ち物が置ける等、幼児の生活や遊びの動線にそって配置することが大切である。
- 2歳児の場合、遊びで衣服が濡れたり排泄がうまくできず衣服を汚したりして、頻繁に衣類を取り替えるので、取り替えの衣類を常備しておく必要がある。その際、簡単な脱ぎ着は、保育者に見守られる中で自分でやろうとすることが大切なので、幼児が自分の力で衣類を取り出すことができるように、形や大きさに配慮した衣服収納棚を置くことが望ましい。
- 幼児の一日の園生活の流れにそって必要な生活習慣を身に付けることができるよう、個人用タオルかけ、傘立て等を置くことが望ましい。その際、2歳児が自分の力で扱えることに配慮することが望ましい。

ウ) 水飲み場・手洗い場、便所

- 水飲み場や手洗い場は、保育室内や2歳児が活動する園内の必要な箇所に設置する必要がある。その際、2歳児が使用しやすいように水道の蛇口や流し等を改善することが望ましい。また、消毒液等の薬品等の置く場所などにも配慮することが望ましい。
- 2歳児は排泄の自立に取り組む大切な時期なので、保育室と隣接して便所があり、排泄の自立ができ始めた幼児が自分から行動でき、またその様子を保育者が見守ることができる距離にあることが望ましい。また、便所には、幼児が自分でトイレットペーパーを使うことができる等の配慮も必要である。

さらに排泄がうまくできず汚れてしまった時に身体を洗うことができるようなシャワー設備等の洗浄施設を備えることが望ましい。便所の近くでは、パンツやおむつ、お尻ふき等を個人用の棚に収納しておくことが望ましい。

幼児が脱ぎ着をする場には、寒い時期でも幼児が座ってズボンやパンツをはくことができるように素材に配慮した台を置くことが望ましい。

なお、便所などは、明るく清潔にしておくことはもちろんであるが、壁やドアに装飾などして幼児に親しみのある空間にしておくことも、幼児が進んで自分ひとりで排泄をするようになるための工夫として大切である。

イ 園舎外の施設・設備：専用の園庭の確保

- 2歳児は、興味をもったものに即かわり遊び出すことが多く、危険を予測したり、安全に配慮したりすることはうまくできない。

また、活発に動く4～5歳児に憧れの気持ちを抱きつつも、動きはぎこちないので、一緒に活動することで2歳児にとっては危険な動きに巻き込まれてしまう可能性もある。また4～5歳児と一緒にでは、2歳児が思うように遊具が使えなかったりして、十分遊べないこともある。

こうした理由から、2歳児の幼児が遊べる専用の園庭があることが望ましい。

もし、そうでない場合には、2歳児が専ら園庭を使う時間を確保したり、揺れたり回転したりする固定遊具などには保育者がつくなどして、特別に安全に配慮することが望ましい。

幼児の成長とともに、他学年と自然な形で交流することも、一方で、まだ2歳児が思いきり戸外遊びを楽しむことも必要なので、2歳児が専ら園庭を使う時間の配分のバランスをとることも必要である。

ウ 安全の確保

ア 園舎内の安全の確保

- 保育室を中心に、園舎内の安全の点検は、教職員全体で行い、必要ならば改善するなど、安全に対する十分な配慮をすることが必要である。

特に、保育室や廊下などの施設や設備の設置に当たっては、非常時などの避難経路の確保などに十分に配慮する必要がある。

なお、こうした安全の点検は、幼児の成長とともに行動範囲が広がるので、定期的に行うなどして、常に危険物等を排除し安全の確保に努めることが重要である。

イ 園舎外の安全の確保

- 固定遊具、園庭の飼育動物やその小屋、池や起伏、自然環境等、園庭を中心に園舎外の環境を点検し、安全を確保する必要がある。

なお、こうした点検は、教職員全体で適宜行い改善するなど、安全に対して十分に配慮することが重要である。

（4）保育内容等

2歳児の発達を踏まえ、養護的側面を重視した保育内容を検討する必要がある。また、各幼稚園には、教育目標があり、それに基づいて3歳児以上の教育の全体計画である教育課程が編成されているので、こうした3歳児以上の幼稚園教育に滑らかに移行していけることにも留意し、2歳児にふさわしい保育内容を検討する必要がある。

ア 2歳児保育で重視したい事項

- 特区における取組を検証する中で、一部の幼稚園において、3歳児との混合学級等において、保育者が一斉に歌や踊り、絵を描くなどを促して活動している時間の中で、2歳児が保育者の言葉と動きを見て、言われたとおりに動くことのみに終わっている状況が見受けられた。こうした状況下で、2歳児は、指しゃぶりをしたり、手足をいじるなど落ち着きのない姿が見られた。このように、2歳児については、一見、集団活動が行われているように見えても、幼児同士のかかわりを通した「集団を通した教育」が成立していない状況が見られる。

2歳児の発達の特徴として、複数の幼児が並行的に遊ぶ中で、保育者との一対一の間関係を基本とする幼児同士が同じ活動を同じ場で行っているという状況であり、3歳児同士のように、かかわり合う、見合う、模倣し合うという関係にはなりにくい。

- こうした点も踏まえれば、2歳児保育として重視したいと思われる主な保育内容は、次に挙げるとおりである。

なお、各幼稚園の2歳児保育を受ける幼児の人数、クラスやグループ等の編成によって、必要な保育内容が異なってくるので、以下に示す保育内容を手がかりにして、各幼稚園において、幼児の実態に沿って検討する必要がある。

- ① 食事、排泄、衣服の着替えなどの基本的な生活習慣を身に付ける。
- ② 全身を使う遊び、手や指を使う遊びなどを繰り返して行い、いろいろな体の動きを楽しむ。
- ③ 自分の好きなものや道具、遊びなどを見つけ、それらとのかかわりや遊びを楽しむ。
- ④ 友達の遊びに興味をもったり、先生や友達と一緒に遊んだりする。
- ⑤ 園生活に必要な言葉がわかり、保育者の簡単な指示がわかる。
- ⑥ ごっこ遊びなどをする中で、先生や友達と言葉のやり取りを楽しむ。

イ 保育における計画の作成と保育の留意事項

幼児の発達や、興味や関心、生活の流れ、また2歳児保育の特質を踏まえて、各幼稚園において創意工夫することが大切である。

ア 保育における計画の作成

- 幼稚園内の施設に2歳児を受け入れるに当たっては、幼児の実態に基づいて保育の計画を作成し、計画性ある指導を行うことが大切である。

その際、2歳児の保育内容は、単に3歳児の教育内容をそのまま下ろしてくるのではなく、2歳児の発達を踏まえたものでなくてはならない。また、保育の計画の形式は、2歳児保育に必要な計画を立てるという視点から工夫する必要がある。

- 長期の保育の計画の作成に当たっては、全職員の理解のもとに、2歳児の保育をどのような内容としていくかについて十分に検討し、幼児の実態、幼稚園や地域の実態を踏まえて作成する必要がある。

また、幼児の発達や保護者の実態等にそって、適宜、親子で活動する場面などを取り入れながら、親も子も楽しみに登園し、成長することにつながる計画とすることが大切である。

- 3歳児以上の幼稚園教育を受けるようになると、クラスやグループ等の人数や学級の雰囲気、保育室、担任等が変わり、幼児の戸惑いも大きいことが予想されるので、長期の保育の計画作成において、2歳児から3歳児への移行が滑らかなものとなるよう配慮をする必要がある。

また、2歳児から3歳児への移行への配慮については、保護者にも伝え、理解を得るようにする。

- 短期の保育の計画では、幼児一人一人が興味や関心、発達等が異なり、個人差が大きいことに配慮し、家庭との連携を図りつつ、幼児一人一人の実態に即して作成する必要がある。

特に、登園日数が異なる幼児がいるクラスやグループ等の編成の場合には、その幼児も戸惑いが少なく、安心して過ごせるように配慮する必要がある。

また、具体的な保育の展開においては、幼児一人一人の活動に応じて、柔軟に保育を展開していくことが必要なので、時間的にもゆとりをもった保育の計画を立てることが大切である。

さらに、個人別の保育記録等もつけながら、幼児理解を深め、一人一人について発達の見通しをもって援助をすることが大切である。

- 園行事に参加する際、2歳児は、短時間の行事への参加や、行事の一部への参加など無理のない参加を検討する等、2歳児の発達の特性や興味・関心に配慮し、工夫する必要がある。
- 指導計画の作成に当たっては、常に、実施、点検・評価を重ねながら、幼児の実態にそった指導計画を作成することが大切である。
- 2歳児の場合、年度途中での受入れや不定期的に登園する幼児、親子で登園する幼児の受入れも予想される。このため、それぞれの実態に応じて個別の指導計画を作成する必要がある。

- 2歳児は、特に、緊急時に保育者の指示に従った行動がとりにくいので、避難訓練などは適宜行い、2歳児があわてないで避難できるようにすることが重要である。その際、2歳児がクラスやグループ等の生活に安定する過程を見通して、年間の保育の計画の中に位置づけるなどの配慮が必要である。

(イ) 保育における留意事項

- 2歳児は、これまでの生活経験や月齢などにより発達個人の差が大きい時期なので、幼児一人一人の発育・発達状態を把握し、一人一人の実態にそったきめ細やかな援助を行う必要がある。

また、してほしいことや困ったことなど自分の思いをうまく言葉に表すことができないことも多いので、保育者は、ゆったりとした構えで幼児と接し安心感を持たせるとともに、幼児の表情やしぐさなどからその内面を読み取っていく姿勢をもつことが重要である。

- 日々の保育では、幼児が健康で快適な生活を送れるように、一日の中で適切な休息や水分補給を行い、食事や排泄、衣服の着替え等の基本的な生活習慣を身に付けるための援助をきめ細かく行う必要がある。その際、幼児の少しの変化をもとらえる目をもつこと、幼児なりの「できた」という気持ちを受け止め共感的な援助をすることが大切である。

- 2歳児の時期は自立と甘えの間での葛藤が起こりやすいため、幼児の気持ちを理解し受容しながら信頼関係を深め、幼児が自分でしようとする気持ちを損なわないようにして、自立への意欲を育てていくことが大切である。

- 保育者は、幼児一人一人の発達や、興味や関心、意識の流れなどにそって環境を構成し、幼児自らが好きな遊びを見つけ十分に遊びを楽しめるような状況をつくり、遊びへの意欲を育てていくことが大切である。

また、幼児一人一人がもつ生活のリズムにそって、食事や午睡も含めて幼児にとって無理のない一日の保育の流れをつくることも大切である。

特に、必要があってクラスやグループ全体で一斉に活動する時には、2歳児は信頼する大人に言われたことをそのまま行動に移す傾向があるので、活動への興味や関心、活動時間等、幼児一人一人の実態に応じて柔軟に対応しながら、その子らしさを引き出すかわりをしていくことが大切である。

- 特に、年度途中に受け入れる幼児に対しては、クラスやグループ等の生活に慣れるように個別に指導していくとともに、他の幼児たちもその幼児に関心をもち、触れ合うことができるように働きかけていくことも大切である。

- 幼児同士がぶつかり合い、けんかになった場合には、保育者は、問題の解決のみを急ぐのではなく、互いの思いを受け止めながら、ゆったりとした構えで対応することが大切である。

また、それぞれの幼児の心の動きに応じ、安定することを待ちながら、相手の思いを伝えていく援助をすることも大切である。

ウ 遊具・用具

(ア) 保育に必要な遊具・用具

- 計画にそって保育を行うに当たって、必要な種類及び数の遊具・用具を備える必要がある。登ったりくぐったりの全身の動きを誘う遊具類、ままごとなどのごっこ遊びを楽しむもの、砂や粘土類など感触や表現を楽しむもの、積み木やブロックなど構成して遊ぶもの、絵本等、2歳児の興味や関心、発達等にそって、遊具・用具を選ぶことが望ましい。

その際、2歳児が扱いやすい大きさや形などに配慮する必要がある。

また、2歳児は個別に使いたい気持ちが強いので、場合によっては遊具や用具は十分な数を用意することも必要である。

- 幼児が直接に触れ、扱うものであるから、材料や構造上の安全性に十分配慮して、遊具を選択する必要がある。

また、幼児にとって心地よく、親しみやすい材質であることも大切である。

(4) 収納、清潔、安全点検

- 幼児自身が、遊びの一環として遊具・用具を出し入れできることに配慮して、遊具・用具の量や種類、収納の仕方を工夫する必要がある。

なお、遊具・用具の安全点検は適宜行い、必要に応じ改善していく。

- 2歳児の場合、遊具や用具を口にすることもあるので、適宜、洗ったり拭いたり、消毒したりして、清潔や衛生に配慮していく必要がある。
- 3歳以上の幼児が、通常使っている用具類の中でもはさみなど2歳児が使うと危険を伴うものも予想されるので、特に2歳児が活動する場に置く用具類などの管理を適切に行い、幼児が使用するとき保育者が渡すなどの配慮をする必要がある。
- 戸外遊びの遊具・用具などの中には、3歳以上の幼児が使う遊具・用具と共通なものが多い。この場合、あらかじめ2歳児が使っても安全かどうかなどの点検を行い、場合によっては、2歳児の使用を制限したり、保育者が必ず付き添ったりするなどの配慮が必要である。

(5) 保育体制と保育者の資質向上

ア 保育体制

(ア) 園全体の協力体制と複数担当

- 2歳児を受け入れるに当たっては、担当の保育者に任せるだけでなく、教職員全体の協力体制が必要である。また、2歳児を複数で担当する場合は、個々の幼児理解について話し合ったり、一緒に保育の計画を作成したりして、援助の方向について共有して保育に臨むことが大切である。
- 2歳児を複数で担当する際、年度途中の受入れも含めて入園当初は、幼児にとっては、特定の保育者とのつながりをもつことで安定することもあるので、必要に応じて担当制を取り入れるなど、幼児の実態に応じて柔軟な保育体制をとるようにする必要がある。

(イ) 預かり保育担当者との提携

- 2歳児の預かり保育を行う場合は、保育室が変わったり、担任が変わったりすると、2歳児が不安定になることも予想されるので、通常の保育時間を担当する保育者と預かり保育の担当者との緊密な連絡・連携が必要である。

特に入園当初は、通常の保育時間を担当する保育者が一緒に預かり保育の部屋で過ごす等、2歳児が一日を安心して過ごせるような保育体制にも配慮する必要がある。

イ 保育者の資質向上

(ア) 2歳児の発達や保育についての理解

- 保育者には、2歳児の発育・発達の特徴を十分に理解した上で、幼児一人一人について発達の見通しをもって援助を行う力量が必要である。

また、幼児の気持ちに寄り添い、幼児が甘えを出したりスキンシップを求めたりできるような雰囲気をもつことも望ましいことである。

- 園外研修や園内研修を通して、2歳児の発育・発達への理解を深め、保育内容や保育方法について学び、実践力を高める努力が必要である。

また2歳児保育を行うに当たっては、保育所における2歳児保育の実際を見たり体験したりなどとして、2歳児の発達や保育の在り方についての研修を行うことが大切である。

(4) 保護者との関係を構築する力と親育ちの支援

- 2歳児をもつ保護者からの相談を受けたり、親育ちのプログラムを作成したりする等、積極的に子育て支援をすることが期待されているので、保育者の資質として、保護者との関係を構築する力を持ち、子育て支援を実践していく力量をつける必要がある。

(6) 家庭との連携と子育て支援

2歳児保育を実施することは、保護者の育児不安、負担の解消、就労の機会の拡大等の保護者のニーズに応えることになる。その際、単に保護者の子育てを肩代わりするのではなく、家庭と緊密な連携をとりながら、保護者の幼児の成長への理解や共感を高め、親として成長する機会を提供することが大切である。

ア 家庭との緊密な連携

(ア) 保護者との信頼関係の構築

- 幼児の家庭での過ごし方やクラスやグループ等での状況等について情報交換するなど、家庭と緊密な連携をとりながら、保育者と保護者がともに幼児を育てるという意識をもつことが大切である。

このため、園便りやクラス便り、連絡帳、または保育参観や参加、個人面談など様々な機会を使って保育者の保育方針を家庭に伝え、保育者と家庭の連携を深めることを積み重ね、保護者一人一人との信頼関係を築くことが大切である。

(イ) 保護者の育児不安への対応

- 保護者の中には、幼い我が子を登園させることに不安を感じている人もいるので、折に触れて、その幼児の成長や良さを伝えながら、保育者に対して信頼をもってもらうとともに、保護者自身が子育てについて自信を持てるようにしていくことが大切である。
- 特に、育児不安が深刻化している場合は、必要に応じて地域の保健センターや相談機関と連携を図ったり、保育の専門カウンセラーを活用したりすることができるよう、保護者の個々の悩みや相談に応じていく体制を作ることが望ましい。

イ 家庭の教育力の再生・向上につながる子育て支援

(ア) 親子登園の機会の提供

- 2歳児をもつ保護者の中には、子育てがよくわからず、子どもとのかかわりがうまくできないと感じている保護者も少なくない。こうした保護者にとっては、保育者が幼児たちとかわる姿に接することが、日頃の自分の子どもとのかかわりを振り返ったり、改めて子育ての仕方を学んだりする機会となる。

また、折に触れて子どもを通して保育者や他の保護者などつながりをもつことは、孤立した子育てから開放され、保護者自身が、子どもの自立を促すために子離れをしていくことにもつながる。

- このようなことを踏まえ、2歳児保育では、適宜、親子登園の機会をつくり、親としての成長をする場を提供することが必要である。

その際、幼児にとっても保護者にとっても実り多い機会とすることが大切なので、どのような親子登園を企画していくかについて、年間を見通して計画を作成する必要がある。

この場合、幼児たちと一緒にいろいろな遊びやゲームを楽しむ、自分の子どもと一緒に何かをつくる、母親だけでなく父親も一緒に活動する等、保護者や幼稚園の実態にそって様々な工夫をする必要がある。

また、地域の人材やボランティア、子育てNPOを活用するなどして、楽しく活動しながら子育てを学べる場をつくることも大切である。

(イ) 子育てを話し合う場の提供

- 自我が芽生える2歳児は、自立と甘えとの間での葛藤があり、家庭でも子育ての悩みは尽きない。自我が芽生える2歳児の発達やその発達に応じたかかわり方などについて、保育者の話を聞いたり、他の保護者と話し合ったりして、子育てを共有することは非常に大切である。

また、3歳以上の幼児の保護者との交流の場も設けながら、子育ての先輩の話を聞くことも有効である。いずれにしても、保護者が、積極的に話し合える雰囲気をつくるのが大切である。

(ウ) 子育てに喜びと希望を持たせる取組み

- 保護者が園行事などに積極的に参加することを促し、3歳児、4歳児、5歳児に接する機会をつくりながら、幼児期の発達や幼稚園教育についての理解が得られるようにして、子どもの成長について見通しをもち、ともに喜び期待がもてるようにすることが大切である。